

## 要旨

日本語では、複合動詞として「切り倒す」が言えるのに対して「立ち読む」とは言えない。ところが、「立ち読みする」という複合動名詞は可能である。こうした観察に基づき、本発表では、複合動名詞の主要部である V2 が複合動詞に使えるかどうかに着目して、両者の V2 にどのような違いがあるのかを調べる。これを元に、複合動名詞において可能な意味構造を検討する。その結果、複合動名詞の V2 が複合動詞に使われるものと使われないものの両方があるとわかる。このような 2 つのグループは、動詞の表す行為において活動の仕方は指定されているか否かで違いが捉えられる。このような違いを踏まえ、複合動名詞について、V2 の含まれる活動がさらに修飾を受けるような意味構造を提起する。結果として、先行研究で複合動詞に適用するものとして提案されてきた意味補充操作は、動詞複合語の必要条件であって充分条件ではないことを示す。

## 1. はじめに

現代日本語では、動詞と動詞からなる複合語において、(1) のように、動名詞になるものがある（以下、「複合動名詞」と呼ぶことにする）

## (1) 立ち読み

a. \*中古書店で立ち読むb. 中古書店で立ち読みする

「立ち読み」は、複合動名詞として「スル」形は取るが、複合動詞にはならないという特徴がある。こうした複合語に対して、複合動詞の生産性が高い「切り倒す」のような例は盛んに議論されてきた。しかし、「切り倒す v.s. \*立ち読む」のような語彙的ギャップ（lexical gap）は捉えられてきていない。なぜ複合動詞が不可能なのに、複合動名詞が可能な動詞の組み合わせがあるのかが問題になる。

今回の発表では、複合動名詞になる V2 と複合動詞になる V2 とでどのような違いがあるのか調べる。これを元に、複合動名詞において可能な意味構造に関して示唆するところは何かを検討する。結果として、複合動名詞には、複合動詞にもなる V2 と複合動詞にならない V2 の両方があるとわかった。また、このような結果は複合動名詞が複合動詞と異なる意味構造を持つことを示唆している。

## 2. 先行研究

由本（2013）では、V2 に対して V1 が付帯状況を表す場合に、複合動名詞では V2 が働きかけや使役を表すとし、複合動詞では V2 が移動や位置変化を表す動詞であることが指摘されている。

表 1 複合動詞と複合動名詞において付帯状況を表す場合の V2

	V1	V2	例
複合動名詞	付帯状況（様態）	働きかけや使役	押し売り、立ち読み、飛ばし読み
複合動詞	付帯状況（様態）	移動や位置変化	這い上がる、舞い落ちる、這い寄る

（由本 2013：116 - 117 よりまとめたもの）

しかし、これについて 3 つの問題点が挙げられる。①3 例ずつしか挙げられていないが、すべて

の V2 がこのような特徴ですべてまとめられるのか。②「使役」とは何を意味しているのか。③このほかにどのようなタイプがあるのか。

### 3. 「V1+V2」型複合動名詞における後項動詞の特徴

本発表は、複合動名詞について、(2) のような容認性が高い 68 語を研究対象とする。「借り出しする」のように複合動詞（「借り出す」）も可能なものは除外している。

(2) 開け閉め、上げ下ろし、当て逃げ、行き来、浮き沈み、受け売り、重ね着、崩し書き、切り売り、添い寝、立ち読み、飛ばし読み、量り売り など

これら複合動名詞の後項要素となる V2 に注目すると、複合動詞に使われるかどうかによって、2 つのグループに分けられる。①複合動詞<sup>1</sup>になりうる V2（例えば、「押し入れる」（「出し入れ」））、②複合動詞に使われない V2（例えば、「着痩せ」）の 2 種類があるとわかる。以下では前者をグループ 1、後者をグループ 2 とする。

この 2 つのグループの動詞は 7 つのタイプに分けられる。それぞれ①活動動詞（例：「泣く」、「泳ぐ」）、②瞬間変化動詞（例：「死ぬ」、「寝る」）、③状態変化他動詞（例：「閉める」、「張る」）、④位置変化他動詞（例：「下げる」、「入れる」）、⑤作成動詞（例：「書く」、「撮る」）、⑥漸進主題動詞（例：「読む」、「食う」）、⑦所有関係変化動詞（例：「売る」、「借りる」）である。それぞれのグループに属している動詞をまとめてみると、表 2 のようになる。

表 2 複合動名詞のグループ 1 と 2 における V2 のタイプ

動詞タイプ (例) グループ	①活動動詞 「泣く」	②瞬間変化 動詞 「死ぬ」	③状態変化 他動詞 「閉める」	④位置変化 他動詞 「下げる」	⑤作成動詞 「書く」	⑥漸進主題 動詞 「読む」	⑦所有関係 変化動詞 「売る」
グループ 1	○	○	○	○	○	○	×
グループ 2	○	○	○	×	○	×	○

グループ 1 とグループ 2 に属している動詞は表 3、表 4 のようになる。

表 3 複合動詞に使われる V2

	V2	複合動詞	複合動名詞
①活動動詞	洗う 打つ 泳ぐ 聞く 泣く 迎える	こすり洗う (1) 流し/狙い/迎え打つ (3) 群れ泳ぐ (1) 伝え/盗み/漏れ聞く (3) 忍び/すすり/咽び泣く (3) 出/呼び迎える (2)	押し/掴み/揉み洗い (3) 焼き討ち (1) 立ち泳ぎ (1) 立ち/盗み/見聞き (3) もらい/しゃくり泣き (2) 送り迎え (1)
②瞬間変化動詞	入る 起きる 降りる 隠れる 来る 下がる 沈む 死ぬ	消え/食い/染み入るなど (44) 飛び/跳ね起きる (2) 駆け/飛び/舞い降りるなど (12) 逃げ隠れる (1) 迫り/流れ/寄せ来るなど (15) 食い/垂れ/吊り下がるなど (11) 打ち/泣き沈む (2) 溺れ/凍え/焼け死ぬ (3)	出入り (1) 寝起き (1) 乗り降り (1) 見え隠れ (1) 行き来 (1) 上がり下がり (1) 浮き沈み (1) 討ち死に (1)
③状態変化他動詞	置く	書き/差し/据え/捨て置く (4)	買い置き (1)

<sup>1</sup> 『複合動詞用例データベース』に集められたデータを利用している (<http://csd.ninjal.ac.jp/comp/>)

	溜める 張る 増す	書き/掃き溜める (2) 言い/突っ/見張るなど (6) 買い/建て/積み/踏み増す (4)	買い/食い/寝だめ (3) 切り張り (1) 焼き増し (1)
④位置変化他動詞	入れる 下ろす 下る 下げる 取る	押し/書き/差し入れるなど (75) 書き/吊り/投げ下ろすなど (38) 駆け/漕ぎ/攻め下るなど (6) 押し/切り/吊り下げるなど (13) 写し/買い/書き取るなど (70)	出し入れ (1) 上げ下ろし (1) 上り下り (1) 上げ下げ (1) やり取り (1)
⑤作成動詞	撮る	写し撮る (1)	盗み撮り (1)
⑥漸進主題動詞	食う 飲む 読む	食う (1) 読み (1) 飲む (1)	立ち/買い/食い (2) 立ち/回し/飲み (2) 立ち/拾い/走り/飛ばし/読み (3)
⑦所有変化動詞	なし		

表 4 複合動詞に使われない V2

	V2	複合動詞	複合動名詞
①活動動詞	飼う 稼ぐ	なし なし	放し飼い (1) 出稼ぎ (1)
②瞬間変化動詞	欠ける 着る 寝る 逃げる  冷える 痩せる	なし なし なし なし  なし なし	満ち欠け (1) 重ね着 (1) 添い寝 (1) 振り/持ち/当て/食い/乗り/ひき/書き/売り逃げ (8) 寝冷え (1) 着痩せ (1)
③状態変化他動詞	差す 閉める 縮む	なし なし なし	抜き差し (1) 開け閉め (1) 伸び縮み (1)
④位置変化他動詞	なし		
⑤作成動詞	書く 炊く 縫う	なし なし なし	走り/読み/崩し/添え書き (4) 追い炊き (1) 纏り縫い (1)
⑥漸進主題動詞	なし		
⑦所有変化動詞	売る 買う 借りる	なし なし なし	卸/受け/切り/叩き/投/量り売り (7) 売り買い (1) 貸し借り (1)

表 2 に示したように、グループ 1 には、⑦所有関係変化動詞がない。グループ 2 には、④位置変化を表す他動詞、⑥漸進主題変化動詞が見当たらない。これらのタイプはすべて (3) のような達成動詞 (accomplishment) の意味構造 (語彙概念構造、以下 LCS) によって表示されるものである。しかし、複合動詞になりうるか、なりえないかという点で二分されている。

(3) 達成動詞の LCS 表記 [[x ACT] CAUSE [BECOME [y <STATE>]]]

V2 が活動動詞や到達動詞の場合はこの二分がないため、今回の発表は、V2 が達成動詞であるものに限って複合動名詞と複合動詞の違いを検討する。

## 4. 達成動詞の意味分析

### 4.1 先行研究

Vendler (1967) では、動詞が表す時間性によって、活動 (activity)、到達 (achievement)、達成 (accomplishment)、状態 (state) という分類を提案して以来、その妥当性を検討する議論が多くさ

れてきた。特に達成動詞に関しては、動詞述語の意味クラスとして均一的な性質を持っていないことが指摘されている（Rappaport Hovav (2008)、Rothstein (2012) など）。どのように異なるものが存在しているのかについて、主に以下の2つの立場があげられる。

Levin (2000) は、**cause relation** を表す原因事象と結果事象の間で、結果事象が原因事象に時間的に依存しておらず、それぞれ独立したイベントとしてあり、使役事象になるものとならないものがあるとする。状態変化他動詞と漸進主題動詞では、それぞれ (4) と (5) に示すように、例えば「花瓶が壊れた」というイベントは「落とした」のような独立したイベント (**independent event**) によって起こされることも、起こされないこともありうるが、「サンドイッチが食べられた」というイベントは原因的に独立した別のイベントに関連しているとは想定できない。

(4) John broke the vase by dropping it on the floor

(5) John ate the sandwich by eating it.

(Rothstein 2004:103)

さらに作成動詞についても、漸進主題動詞と同じように、使役動詞の分析が適用できないと指摘されている。例えば、作成動詞として、**bake a cake** は、**bake** という特定された行為なしには **cake** は存在しないという関係が成り立つ。

一方、Rothstein (2012) では、達成動詞を、活動 (ACT) が語彙的に指定されているか (**lexically specified**) どうかによって、さらに下位分類をしている。例えば、漸進主題動詞の場合、**read the form, or read the exam, read War and Peace** はいずれも読むという活動を指定する。それに対して、**open a window, open a jar of jam, open a bottle of wine** のような状態変化他動詞の場合、結果だけを指定しているから、どういう活動をするかは動詞の意味に含まれない。つまり、**open** という行為において活動の仕方は語彙的には指定されていないのに対して、**read** という活動は語彙的に指定されているとしている。

以上見たように、両立場で達成動詞の扱い方が異なるが、実質的にどのような下位分類があるのかに関しては、共通したところがあると思われる。要は、状態変化他動詞の場合、活動が語彙的に指定されていないので、原因事象が結果事象と独立して起こることが可能である。それに対して漸進主題動詞、作成動詞の場合には、活動がすでに語彙的に指定されているので、結果事象と独立しては起こりえない。

## 4.2 日本語の場合

以上の先行研究を踏まえ、日本語の達成動詞の意味クラスを検討する。日本語で、達成動詞において原因事象と結果事象が独立事象として働くかどうかをチェックするためのテストとしては、自他交替が可能かどうかによる判断が使用できる。Levin and Rappaport Hovav (1995) は、**break** のような例では、起因事象がどのようなものであるかが未指定 (**-specified**) であるため自他交替が起こるのに対し、**cut** のような例では、事象の指定がある (**+specified**) ため、自他交替が起こらないと想定している。日本語の自他交替も同じように統語的な振る舞いが見られる。例えば、

(6) 茶碗を割った——茶碗が割れた。

自他交替できるかどうかによってチェックすると、表 2 における「位置変化他動詞」(③)、「状態変化他動詞」(④) は起因事象が指定されていないのに対して、「作成動詞」(⑤)、「漸進主題動詞」(⑥)、「所有関係変化動詞」(⑦) は起因事象が指定されていると判断できる。

自他交替の可否によって、達成動詞において、活動を表す原因事象が指定されているかどうか判



り読む／食う／飲む」のような複合動詞にしか出てこない。

予測どおりにならなかった例は、通時的な変化などの要因によってもたらされた可能性があると思われる。一方、予測どおりになった例については、複合動名詞と複合動詞の V2 に活動が指定されているかどうかという違いが見られる。このような違いを示すもう一つの言語事実としては、V1 と V2 の語順が逆になる複合動名詞と複合動詞が挙げられる。同じ構成要素であっても、複合動名詞か複合動詞として使われることによって V2 が異なる。例えば、

(9) 「崩し書き」・「書き崩す」、「殴り書き」・「書き殴る」、「回し飲み」・「飲み回す」

これらのペアにおいて、複合動名詞の V2 (「一書く」、「一飲む」) になるのは活動が指定されている達成動詞である。「しゃくり泣き」(「泣きしゃくる」)、「狂い咲き」(「咲き狂う」) のように複合動名詞の V2 が活動動詞のものもあるが、活動が指定されていることには変わらない。

由本 (2013) では、V1 が V2 の意味を補充するような意味関係をなす語彙的複合動詞の生産性が高いと指摘されている。それに対して本発表としては、複合動名詞と複合動詞の V2 が達成動詞の場合を加味することで、意味補充は動詞複合語の必要条件であって、充分条件ではないことを主張する。意味補充を意味操作として想定する必要がないと思われる。

## 6. 複合動名詞の意味構造への示唆

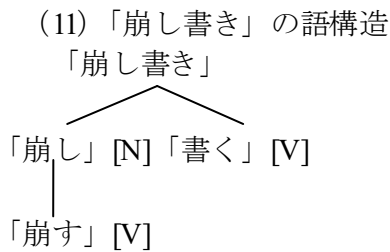
本発表では、達成動詞の場合、V2 に活動が語彙的に指定されるかどうかによって、複合動名詞の意味構造にかかわる制約が影響していると主張する。「崩し書き」のような場合、達成動詞の V2 がすでに活動を指定している。そのため、「\*崩し書く」が言えないのは、二つの活動を一つの動詞の概念にする整合性を持っていないためだと思われる。「崩す」と「書く」の LCS は (10) のように表される。

(10) 「崩す」: [[x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [BE AT< destroyed >]]]

「書く」: [[x ACT<sub>writing</sub><sup>3</sup>] CAUSE [y BECOME [BE IN-EXISTENCE]]]

しかし、これによってだけでは「崩し書き」がなぜ言えるのかは自動的に導けない。第 4 節で見た複合動名詞の意味クラスの特徴によると、起因事象の表す行為の様態が指定される漸進主題動詞、作成動詞、所有関係変化動詞は、連用形名詞になることを通じて、起因事象が未指定になる。ほかの要素と自由に結合できる例として、N-V 型複合語が生産的に見られる(「宛名書き、手書き、上書き、下書き、横書き」)。つまり、「崩し書き」の中で、「崩し」はすでに動詞としての位置を失い、ただの付加詞 (adjunct) として働く。このような修飾関係としての語構造は、(11) のように捉えることができる。それに対応している意味構造は、(12) のように想定される。

<sup>3</sup> writing はここで原因事象が指定される表記として使われる。



(12) 「崩し書き」の意味構造  
 [[x kuzusi-ACT<sub>writing</sub>] CAUSE [y BECOME [BE IN-EXISTENCE]]]

ここで、日本語の結果構文との対照を見てみる。

- (13) 花瓶を粉々に割った。 (14) 湖がカチカチに凍った。  
 (15) \*ジョンがその男を血まみれに殴った。

(13) と (14) では、「割れた」、「凍った」という行為の結果がすでに動詞「割る」、「凍る」にエンコードされているが、「割る」、「凍る」はそれぞれ「粉々に」、「カチカチ」のような副詞によって、結果を詳細に指定することが可能である。それに対して、(15) のように、「殴る」のような動詞は結果を含んでいないため、結果構文に使われない。一方、「立ち読み」、「崩し書き」のような複合動名詞の場合、V2 にすでに活動が指定されている。(13)、(14) で動詞がすでに指定している結果状態がさらに結果述語による修飾をうけることができるのと同じように、「立ち読み」などの場合は、V2 に指定されている活動内容がさらに修飾を受けていると分析できる。ただし、複合動名詞は複合動詞と比べて、生産性がかなり低い事実もあるため、すべての活動が指定されている動詞に対して、さらに修飾を受けるとは限らない。

## 7. 結論と今後の課題

複合動名詞の V2 が複合動詞に使われるかどうかという基準で調査した結果、達成動詞に異なる意味クラスが存在することが、複合動詞と複合動名詞の作られ方に直接関連していることを示した。このような特徴から、結果構文と並行して、複合動名詞の意味構造にも修飾構造がありうると示唆される。しかし、このような修飾構造をなしている動機付けは、明らかにされていない。また、V2 が活動動詞や到達動詞の場合は違いが示されていないため、意味クラスの違いが複合動名詞と複合動詞の違いを決定付ける唯一の要因ではないとも示唆される。これらを今後の課題とする。

## 参考文献

- Levin, Beth (2000) Aspect, Lexical Semantic Properties, and Argument Expression. *Proceedings of the Twenty-Sixth Annual Meeting of the Berkeley*, 413-429
- Levin, Beth and Rappaport Hovav, Malka (1995) *Unaccusativity: At the syntax-lexical semantics interface*. MIT press.
- Rappaport Hovav, Malka (2008) Lexicalized meaning and the internal structure of events. In: Rothstein, Susan (ed.) *Theoretical and Crosslinguistic Approaches to the Semantics of Aspect*, 13-42. John Benjamins.
- Rothstein, Susan (2004) *Structuring events: a study in the semantics of lexical aspect*. Blackwell.
- Rothstein, Susan (2012) Another Look at Accomplishments and Incrementality. In: Violeta Demonte and Louise McNally(eds.) *Telicity, Change and State*, 60-121. Oxford University Press.
- Vendler, Zeno (1967) Verbs and times. In: Vendler, Zeno (ed.) *Linguistics in philosophy*, 97-121. Cornell University Press.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」 影山太郎編『複合動詞研究の最先端』 109-142. ひつじ書房